

NPO法人 海に学ぶ体験活動協議会 第7回全国フォーラム

～海と生きる～

期日 平成25年2月2日(土) 13:30～17:30

会場 東京海洋大学品川キャンパス

楽水会館1階大会議室(鈴木善幸記念ホール)

キーノートスピーチ

「未来に繋ぐ故郷の海」

穴原 奈都 氏(三宅島ネイチャーガイド)

司会 続きまして、キーノートスピーチでございます。

お一人目として三宅島ネイチャーガイドの穴原奈都様にスピーチをお願いいたしました。テーマは「未来に繋ぐ故郷の海」ということでお話させていただきます。

まず、私から穴原様の略歴をご紹介します。

東京都の三宅島に生まれ、三宅島を拠点に研究活動していた海洋生物学者、故ジャック・モイヤー博士に影響を受け、海洋生物に興味を持たれたそうです。2000年、三宅島雄山噴火により全島避難となり、2007年に「三宅島海洋教室実行委員会」を設立され、2010年に帰島の運びとなり、三宅島でネイチャーガイドを始められ、現在、三宅島の観光PR、イベント企画、海洋自然体験など、大変ご活躍中でございます。大変ご多忙の中、本日のCNAC全国フォーラムにお越しいただきました。

以上、大変簡単ですけれども、穴原様のご紹介をさせていただきました。

それでは、穴原様のスピーチです。よろしく願いいたします。

穴原 こんにちは、皆さん。三宅島から参りました穴原奈都と申します。

きょうはこのような貴重な機会にお話しさせていただく機会を与えていただきまして、大変光栄に思っております。まだまだ未熟な立場ではありますが、現在、三宅島に戻り、いろいろと一から挑戦していることを少しお話しさせていただきまして、各地で奮闘している諸先輩方のいろいろなご意見やお話などをいただけたらと思っております。

それでは、よろしく願いいたします。

では、今回は「未来に繋ぐ故郷の海」というタイトルでお話しさせていただきます。

こちらは三宅島の海から見た全景になります。

皆さん、三宅島をご存じでしょうか。全国的に海にかかわる活動をしている方々が多いのでご存じの方も多いかと思いますが、三宅島の概要から少しお話しさせていただきます。

東京都伊豆諸島のほぼ中央に位置する島として、東京から南へ180キロ。きょうは、きのう船で6時間かけて東京にやってまいりました。気候的には、黒潮が流れる海に囲まれた温暖な気候です。富士箱根伊豆国立公園に島全体が指定されておりまして、海も森も非常に恵まれた自然環境が残っております。また、三宅島と言えば活発な火山島ということで知られておりますが、富士火山帯に属する活火山です。

この右の下の図は三宅島の溶岩の地質図をあらわしているんですけれども、このカラフルな彩りがされているのは、過去のたび重なる噴火の流れ出た溶岩流をあらわしているものであります。

このように三宅島が火山島であることは、三宅島を非常に特徴づけるものでもありまして、こういう図から過去を振り返りますと、有史以降、過去 1,000 年の間で 15 回の噴火が記録されていると言われています。大体この図から見て、ばらつきはあるんですけども、大体 20 年から 60 年周期で噴火が起きているという、非常に活発な、まだまだ元気いっぱいな島であります。

右上の写真のように、割れ目噴火といって、割れ目からマグマが噴き出すような噴火が起きます。

ここ 100 年では、1940 年、62 年、83 年、そして 12 年前の 2000 年と 4 回の噴火が起きています。なので、もう 80 歳近くになるおばあちゃんや、おじいちゃんや、島の方ですと、噴火は 4 回目だという方もいらっしゃるんですけど、余り噴火に対して、非常に恐れ多いというか、危険なもの、怖い、恐ろしいというイメージもあるんですけども、どちらかという噴火と共存する、ともに生きる、そういう意識を持っている島民の方々が多いように思います。

こちらは、三宅島に幾つか、昔からの火山でできたような光景が見られます。

こちらは、ちょっと下のほうが少し切れていて済みませんが、昭和 15 年の噴火でできたひょうたん山という場所になります。このような赤黒いスコリアと呼ばれるマグマのしぶき状になったものが大量に噴出しまして、このように丘をつくったりします。もともとこのひょうたん山があった場所は、昭和 15 年の前までは海だったんですけども、そこが、海底火山の形が起こりまして、陸地が広がっている場所になります。

ここもまた島の中の別の阿古地区という場所ですが、こちらは昭和 58 年、今から 29 年前の噴火でできた新鼻新山と呼ばれている場所です。こちらも、地下のマントルから上昇してきたマグマが地下水や海水と接触すると、大規模なマグマ水蒸気爆発というものが起きます。それによって一晩にしてこのように山ができるんですが、ここがさらに特徴的なのは、この昭和 58 年の噴火が起きた当時は、このままただの山になっていたんですけども、その後、大型の台風が何回も島にもやってきて、半分この山の部分が波によってえぐり取られてしまっているんですね。なので、中の部分が露出して、赤黒い部分がよく見えている、そういう火山とさらに荒波によって作り出された、とても絶景なスポットになっています。

また、噴火というのは危険、怖いというのも、正直、ありまして、ここは昭和 58 年、阿古集落という当時、島で一番大きかった集落に溶岩流がそのまま直撃しまして、集落 350 世帯余り、そして小学校をそのまま丸ごと埋め尽くしてしまった場所です。現在もこのように、埋め尽くされてしまった集落や小学校の跡がそのまま残されていて、それを見ることができるようにもなっています。

甚大な被害がこの当時、出ってしまったんですけども、幸い島民たちは迅速な避難をすることができ、死者、亡くなった方は誰もいませんでした。これも、火山島ということで何度も島が噴火に遭ってきて、お年寄りから噴火の際の心得やそのときの地域の方々で声をかけ合って、いざというときにはみんなで避難するんだという心構えが、日ごろから島の中でできていた、そういったものの大切さをこういうところから感じることができます。

三宅島は 2000 年、そして昭和の噴火でこのような被害をたび重なって受けてきたんですが、このような自然災害というのは、2 年前の東日本大震災での東北地方の方々の被害、そういったものにも非常に共感する部分がありました。やはり地域の方々のつながり、そういった災害に対する心構えが代々受け継がれていることの大切さというのを、このとき改めて三宅島からも発信することの大事さというのを感じています。

しかし、このように溶岩で埋め尽くされてしまった場所でも必ず緑がよみがえってきています。長い時間をかけて、緑というのは本当に人間のスケールをはるかに超えて、徐々に確実に再生してきています。

ここは2,500年前の噴火で火口になった場所に水がたまった大路池という場所です。ここはもともと、先ほどの溶岩で埋め尽くされてしまった荒地だったはずですが、2,500年という長い年月を経て、深い森に覆われています。島の中では、このようにたび重なる噴火によって植生の二次遷移というものが、いろんな段階が見ることができるんですね。それが三宅島の自然環境の多様性を育んでいるものの一つと言えます。

この大路池の周りは満々と水をたたえていまして、伊豆諸島で最大の淡水湖となっています。この恵まれた環境の周りには野生動物、野鳥がたくさん生息しています。水鳥や渡り鳥の旅の中継地点にもなっています。

例えばこちらが三宅島のシンボルバード、アカコッコという天然記念物にもなっているツグミの仲間ですけれども、このほかにも貴重な鳥や珍しい鳥が250種類以上も三宅島では確認されていて、別名バードアイランドとも言われています。

火山島でこのようにある意味、噴火によって破壊と再生が繰り返されているという場所が多く見られます。

噴火による影響は森だけではなく、海の中にも広がっています。

こちらは溶岩が海の中に流れ込んでできた溶岩アーチです。このような溶岩は海の中で非常に複雑な地形をつくりまして、生物の生息場所としてもさまざまなものを生み出しています。このようなトンネルなども、魚たちのすみかや、イセエビとか、そういう底生生物にも非常にすみやすい場所をつくり出しています。

豊かな漁場と、またダイビングスポットとしても重要な場所になっています。こういう場所に、南から流れてくる黒潮に乗って、熱帯性の魚の卵や稚魚が流れてきて魚種も豊富になっています。

また溶岩が流れ込むと、島の周りは水深がその分、浅くなります。伊豆諸島の海域というのは全体的に比較的深い海溝が広がっている、水深が1,000メートル以上にもなる場所が多いんですが、その中に海洋島という形で島が点在していて、回りはドン深と言ってすぐに深くなっている場所が多いです。しかし、三宅島の溶岩が流れ込んだことによって水深が浅くなっていて、その浅くなった水深のところには太陽の光が届くんですね。そういうところに、三宅島は比較的、温帯地域ではありますが、サンゴが生息できる環境がつくられています。

こちらはテーブルサンゴと呼ばれている種類のサンゴですけれども、沖縄とかのようなサンゴ礁までには発達しませんが、テーブルサンゴの群落としては北限と言われている場所になっています。

また、溶岩が流れ込んで沿岸を囲むと、このように天然のタイドプールができます。こういう外からの荒波から隔てられた場所は、小さい種類の魚や、稚魚、幼魚などが安心して暮らせる場所にもなっていますし、また子供たちでも安全にシュノーケリングが楽しめる場所にもなっています。私もここで小さいころから海で泳ぎを覚えたり、魚を覚えてきた場所になっています。

こういった海にはいろいろな生物がすんでいて、サンゴとイソギンチャク、またウミガメも多く見られます。また、海からのおいしい海の恵みもたくさんすんでいます。

そして、三宅島の隣には御蔵島というまた別の島があります。三宅島から20キロほど離れている場

所ですけれども、三宅島とは外観がちょっと違って、おわんをかぶせたような形になっています。

御蔵島は、島が海底火山でできて以降は全く噴火をしない島になっていますが、この御蔵島の周りには野生のミナミバンドウイルカが生息しています。このイルカたちと泳ぐドルフィンスイムというのも、三宅島の一つの魅力になっています。

このような三宅島の自然環境の中で過ごされてきたのが、こちらの海洋学者と生物学者のジャック・モイヤー先生です。

ジャック・モイヤー先生のお話をちょっとさせていただこうと思うんですけれども、モイヤー先生はアメリカ生まれのアメリカ人です。そして、朝鮮戦争時代に長い兵役をした後に、1950年代に三宅島に英語教師として最初に来島されました。その後、教師時代に三宅島の海の魅力、また島民との触れ合いがとても心に残った先生は、三宅島を拠点に研究活動をされる海洋生物学者としてその後、研究などをされました。ここに置かれているような貴重な研究や業績を残された世界的な海洋生物学者です。

この中にも以前からモイヤー先生とかかわりの深い方も多いかと思いますが、研究活動のほかにも精力的に環境教育活動を実践されてきた先駆者と言われる方です。三宅島ではサマースクールということで、島外からも、アメリカからなども子供たちを三宅島に呼び、プログラムを開催しておりました。

そして、1993年にできました三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館の特別顧問として就任しまして、島の中の森に関する環境保全や情報発信、また国際シンポジウムなども開催されて、島のそういった自然環境の保全や観光の発展に大きく貢献されました。

こちらの写真は、上の写真で真ん中に写っているのと下の写真の右側に写っているのは当時の私、小中学生のころの私ですけれども、私も小学校のころにモイヤー先生に直接、海のことを教わった教え子の一人です。

当時は、もちろん島の子供たちは当たり前のように海で遊んでいたんですけれども、いわゆる海というのは、波で遊んだり飛び込んだり、あとは食べられる物をとる場所、この貝や魚は食べられる、食べられない、そういう判断でしかなかったんですけれども、モイヤー先生に出会って、私は海にもっと食べられる魚以外のおもしろい魚がこれだけいるんだということを教えてもらったんですね。それを、クマノミとイソギンチャクは仲よしなんだよというような子供にもわかりやすい言葉で教えてくれました。

そして、その後、モイヤー先生と出会ったのがきっかけで自然にとっても興味を持ち、モイヤー先生と一緒に海鳥の調査やサンゴの調査にくっついて行って、させてもらっていました。

モイヤー先生がいたことで、島内の小学校とも連携して、今まで授業の中で余り取り入れてこなかったシュノーケリングなどの授業をモイヤー先生と学校が連携して行うことも、このとき初めてできるようになりました。

このようなモイヤー先生の功績などは本にもなっておりますし、皆様も非常にご存じの方もいるかと思いますが、私のほうからはここぐらいまでにさせていただきますが、本当にモイヤー先生の影響というのが、三宅島にとっても、そして私自身にとっても大きかったのは、本当に今になって改めて感じています。

そして、モイヤー先生がちょうど環境教育などを大きく展開し始めるというやさきに、2000年の6

月から三宅島で火山活動が始まりました。6月から火山性微動などが起こっていきまして、7月、8月にかけてこのような大規模な爆発が繰り返されていきました。

そのころの映像をごらんください。

(動画上映開始)

ナレーター 平成12年7月、三宅島の中央にある火山、雄山が大きな噴火を始めました。

噴煙は8,000メートルに達しました。

島の全域に火山灰が降り積もり、有毒なガスが出続けました。

9月、避難指示が出され、当時の島民、およそ3,800人は全て島を離れました。

(動画上映終了)

ということで、映像で当時のニュースを見ていただいたんですけども、その2000年当時、私は中学校3年生でした。そのときに三宅島でこのように、今までにない火山活動が起きました。

今までは、先ほどの映像でもごらんいただいたように、溶岩が流出して大体数日でおさまるという場所でした。溶岩が流れて埋め尽くされた部分は非常に影響が大きいんですけども、それ以外の島の部分は島を出るといってもないほどの被害でおさまっていたんですけども、今回に関しては途中で火山性ガスが放出されたことで避難が非常に長期化して、4年半にも及ぶ全島避難になってしまいました。

4年半たって2005年に帰島宣言が出まして、ちょうど2005年2月1日、8年前のきのう三宅島は島民が帰島宣言ということになったんですね。今は通常に暮らすことができるようになっていました。

その長引いたのは、このようにマグマだまりがずっと火山ガスを放出してしまったというのが原因になっています。

そして、2005年に帰島できるようになったんですけども、避難が長引いたため、帰島後、非常に人口などにも影響がありました。噴火前は3,800人、4,000人弱いた島民が、噴火後、避難解除後、帰島してきたのは2,000人ちょっとです。そして、現在は大体2,700人程度の島民が島で暮らしています。

1,000人ほど減ってしまっているんですが、その中でも特に子供たちの数が大幅に減ってしまっています。このグラフは、帰ってきた当時の年齢別の人口の割合になっているんですけども、このグラフは小さくて見にくくて、わかりにくいかと思いますが、30歳以下というのは本当に20%に満たないぐらいの割合になってしまっています。ご年配の方々は結構、島に戻ってきているんですが、やはり小さいお子さんがいる世代や、働き盛りの若者などは島に帰ってきてもすぐに生計が立てられるのかという不安がやはりありまして、なかなか帰ってきている人も少ないですし、人口もそれ以降、ふえてはいません。

また、年間の観光客の数も、噴火前は年間を通して8万人ほど来ていただいていたのが、半数に減ってしまっています。

そして、現在も実はまだ火山ガスの放出は続いています。火山ガスのため、写真にもあるガスマスクの携帯が義務づけられているんですけども、今はほとんど島民も使うことはないぐらい、ガスの濃度はおさまってきています。いろいろと学校とか、そういった公共の施設には脱硫装置があったり、スポーツのイベントや学校行事もガスによって左右されるということもあるんですけども、今はほぼ問題なく暮らせるようになってきています。

ここまで本当に、2000年の噴火から避難中、そして避難後、帰れるようになってからも、全国の多くの方にご支援をいただきまして、三宅島島民は何とか避難生活を乗り切ることができたことに、島民は本当に感謝しております。そして、今、復興してきている様子をぜひ皆さんにも見ていただきたいなと思っています。

このように、噴火後、徐々に島民も戻ってきて、火山ガスがやはり流れやすいエリアというものがあって、そこが高濃度地区ということで規制がされていたんですけども、その規制も緩和されてきています。伝統芸能やお祭りなども再開して、三宅島では徐々に新しい展開が始まってきています。

ここからは、帰島後、私が帰ってからの活動の内容を少しご紹介させていただきます。

私は2010年に、今から3年前に帰ったんですが、その帰った当時に、まず家族とともにギャラリーカフェ・カノンという島の喫茶店を始めました。

店内はこのように木づくりになっているんですけども、私と妹が中心になってやっておりまして、手作りのパンとか、島のアシタバという健康野菜とか、島でとれた野菜などを使ったパンやスイーツなどをつくっています。

あとは、うちのカフェのお勧めとしては、トコロテンのアレンジメニューをつくっています。

トコロテンというのは、皆さんもご存じの方も多いかと思いますが、こういった海の中の海藻、テングサからつくるものです。このテングサは、帰島後、帰ってきてからですけども、うちの父が潜水漁師を始めて、テングサをとっています。海の中でこのように素潜りでテングサをむしりとるんですけども、それを地上に揚げて天日干しをします。この天日干しの作業は私も一緒に手伝うんですけども、これがなかなかの労力がかかります。天候とか、雨が降ったり、日が出たりというタイミングを見ながら干して、このように赤くなっていたものが白くなって、きれいに乾燥したら、このように出荷となります。

もともと三宅島は、昭和の半ばのころからテングサが非常に一大産業となっていて、昔からとっていた年配の潜水漁師さんたちもまだまだ現役で頑張っている方がすごく多いんですけども、それでもやはりとる漁師は少なくなっていて、皆さん、もう年配にもなっているので、このテングサ産業も噴火前と比べては、数も、水揚げ量も激減していますし、今後の将来も危機的なものになっています。

そういうテングサの状況を、私も海と何かもっとかかわることということで、産業を島に帰ってからしっかり興していかなきゃいけないということもありまして、海でとれたテングサを新しいキャラクターに使ってみたり、新しい商品開発にも取り組んでいます。これもまだまだですが、島の産業、海にかかわる産業をしっかり支えて新しいものをつくり出していくというのが、今後の島にも非常に必要なことかなと思っています。

このように父と海に、本当に小さい船外機のボートですけども、そういうのに乗って漁に出たりしています。父はほかにもイセエビや、トコブシなどの貝もとったりしています。

そして、これからがきょうのテーマにもつながることになるんですけども、島の海を島の大人が島の子供たちにといった活動を、私もモイヤー先生に島の海を教えていただき、非常に重要だなということ、噴火を境にさらに実感するようになりまして、まずは大人たちが教えられるようにということで、人材養成講座を、NPOオーシャンファミリー海洋自然体験センターの方々に指導をお願いしたりもして、島の中でこういった講座を始めています。これはこの前の夏で7回目を迎えたんです

けれども、徐々に島の中にもこういった活動が定着してきています。

そして、島の子供たちに向けた海の教室というものを行いたくて、シーカヤックやシュノーケリングを、小中学生を対象に毎年夏休みに行っています。島の子供たちも、先ほど言ったように、海で飛び込んだり、遊んだりというのはよくするんですが、シュノーケリングとフィンをつけて魚をじっくり観察してみようというのは、実は余りしていなかったりするんですね。なので、改めてそういうもののおもしろさを伝えるというのが、今の三宅島にとっても重要なことだなと感じています。

でも、やはり子供たちは島の子供たちらしく元気いっぱいです。島の海で飛び込みなどを散々して遊んでいる、そういう姿を私も非常に好きだし、大事だなと思っています。

また、島内以外に島外の子供たちから、夏休みの数日間宿泊プログラムの受け入れスタッフなどもやっております。

これは、先ほどの溶岩に囲まれた長太郎池という場所でのシュノーケリングとか、島にもいろんな海がありますので、そこで東京の子供たちに、なかなか都会では味わえない島での体験をしてもらっています。

海の中でもいろんな生き物を見てもらって、あとは海だけじゃなく、三宅島はやはり火山島ですので、そういう火山の場所や森も案内しています。島に帰って、島外の子供たちに——大人も含めてですが、ガイドとして伝えるという仕事が、島の中に今まで余り確立されていなかったんですけども、ようやくこういった仕事としても少しずつできるようになってきたと感じています。

また、島の子供たちも最近、学校の総合学習の時間などで火山の勉強をしたり、そういうお手伝いもさせていただけるようになってきています。

また、海での発展的なプログラムとして、このように漁船で外洋に出まして、先ほどの隣の御蔵島という海の近くまで漁船で行き、そこからいきなり外海に——ここからいきなり足のつかない海になるんですが、子供たちも少し練習を積んで、この海に、勇気が要るんですけども、飛び込んで、そしてイルカたちと一緒に泳ぐ、そういうプログラムも三宅島、御蔵島ならではのプログラムとしてやっています。

やはり小さい魚、貝、カニ、そういう生き物から、このように自分の体以上の大きさのある海の生き物に直接肌で感じる距離で接するというのは、子供たちにとっても非常にインパクトがあるもので、やはりそれが、海がつながって生き物たちが生きているんだなというものを実感してもらえる集大成のプログラムとして、こういうドルフィンスイムというのは非常に効果的だなと思っています。

そのほかに私が三宅島でやっていることは、三宅島の自然環境と、スポーツやアートとか、そういうものを融合させたイベントの企画。あとは、先ほどもお話しました自然ガイドの発足ですね。「キュルル」というのは三宅島の自然ガイドのチームですけども、そういったものを島民の人たちと改めて勉強しながら、インタープリターとして修行しながら、島外の方々に伝える、そういう仕組みもようやく展開し始めてきています。

また、先ほどから火山の紹介もしておりますが、行政と協力してこういった看板やマップをつくって、そういうハード面と、島外の方々への観察会なども行っています。

そして、先ほども紹介しましたアカコッコ館には野鳥の会のレンジャーが常駐しておりますので、そのレンジャーたちと海鳥や野鳥の調査も行っております。

そして、先ほどのテングサ、アシタバなどの島の産業を体験するツアーも、いろいろ各地で体験ツ

アーが行われていますが、三宅島はまだまだそういったものがおくらせていたので、ようやくそういう生産者の方々と話をし、体験ツアーにも少しずつ取り組んでいます。

このように三宅島はもともと海に囲まれた島なので、海と密接にかかわってきた島の暮らしをしています。

こちらの写真は、漁師さんたちの正月の「船祝い」という恒例行事ですけれども、その年の大漁と安全を祈願して大漁旗をお正月のときにはためかせて、船からミカンとか、お餅とか、そういう縁起のいいものをまく。そして、島民たちがそれをみんなで拾うというイベントがあるんですけれども、それも島ならではの海と密接にかかわっている生き方の一つであります。

そういうふうに、私は今まだまだ駆け出しではありますが、海と密接にかかわっている島の中で暮らしつつ、それは海とかかかわると同時に、島で暮らしている人々とかかわりといった意味もあります。やはり三宅島では人とのつながりが非常に濃いです。人と人の距離も近いですし、人と自然との距離も非常に近い、そういう場所になっています。そういう中で海を次の世代に伝えることは、島の中でも島の生活、島の未来にかかわる非常に重要なことだと感じています。

先ほどお話をさせていただきましたジャック・モイヤー先生は、実は2004年1月に亡くなりました。来年2014年でモイヤー先生が亡くなってから10年がたとうとしています。島の中ではモイヤー先生が残された功績というのは非常に大きく、その当時のことを知っている島民の方は誰もがモイヤー先生のことを思って、そういう思い起こすことがあるんですけれども、島の中全体としては、そういう思いは受け継がれていなかったり、薄らいできてしまっています。なので、今の島の子供たちにもモイヤー先生が伝えたかったことがうまく伝えられるすが、まだまだ今は残せていないのかなと感じているところです。

当時10年前にモイヤー先生から直接教えてもらった私たちが、今こうして20代、30代になって、自分たちが大人になって、各方面でいろいろな活動をする仲間もふえてきています。そういった仲間たちと一緒に、今改めて今度、教えてもらっていた立場から教える、伝える側の立場として、今自分たちが何ができるのか、いろいろ10年前から時代も変わってきています。子供たちを取り巻く環境も変わってきていると思います。その中で自分たちが一体何ができるんだろうかというのを、今改めて同じ世代、その当時、一緒に学んだ仲間たちと集まって、何ができるか、どうしていったらいいかというのを、今考えるきっかけをもらっているような気がしています。

まだまだ私が活動できていることは限られていますが、こういった三宅島から島の外に、日本に、世界に、少しでも海の大切さや、それを伝えることの重要性を発信していけるようなことがもっともってできればいいなと考えています。

ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

司会 穴原さん、ありがとうございました。

「サーファースピリッツで挑む海辺の環境学習」
堀 直也 氏 (南伊豆エコツアー・ネイチャーガイド)

司会 では、続きまして、お二人目のキーノートスピーチに移りたいと思います。

お二人目は、南伊豆エコツアー・ネイチャーガイドの堀直也様にスピーチをお願いいたしました。

テーマは「サーファースピリッツで挑む海辺の環境学習」ということでお話しいたします。

まず、私から堀様の略歴をご紹介します。

1977年、神奈川県にお生まれになり、2001年に「エコサーファー」という環境活動を行うサーファアのグループを湘南で立ち上げ、環境に関するさまざまな取り組みを実施されてこられました。2011年7月に南伊豆に移住され、現在、南伊豆エコツアーを立ち上げ、ネイチャーガイド、小学生を対象にしたキッズ冒険合宿の運営など、大変ご活躍中でございます。大変ご多忙の中、本日のフォーラムにお越しいただきました。

以上、簡単ですが、堀様のご紹介をさせていただきました。

それでは、堀様、よろしく願いいたします。

堀 皆さん、こんにちは。

一同 こんにちは。

堀 マイクがあり、リモコンがあり、紙の資料があり、こういう持ち物があるので、地声でやらせていただきます。どうぞよろしく願いします。

きょうは「サーファースピリッツで挑む海辺の環境学習」ということで、自分の大先輩である小池さんがこういうタイトルでやれということ、このタイトルで資料をつくってきました。

きょうはサーファー、海、環境、この3つのキーワードについて講演をさせていただければと思います。

まず今、三宅島のお話を聞きまして、我が家は今4人家族なんですけど、年に1回、必ず旅行をしよう、できれば1週間から1カ月ぐらいは旅行しようということ決めて必ず行っているんですけど、ぜひそのうち三宅島に行きたいなと思いました。6時間で行けるんですね。

穴原 そうですね。

堀 すごく近いなと思ったので、ぜひ行きたいなと思います。よろしく願いします。これもご縁です。

まず今回こういった場所に呼んでいただいて本当に光栄に思っています。久しぶりに講演をさせていただくということで、一生懸命、きょうは資料をつくってきました。実はきのう私は寝られなかったです。というのは、緊張して寝られなかったというんじゃなくて、わくわくして寝られなかったというほうが正しいんですが。なので、貴重な30分、精いっぱい自分ができるところを一生懸命やりたいと思います。今回資料をつくる中で気づきがすごくありました。なので、本当に自分自身も勉強になりました。ありがとうございます。

では、始めます。

まず簡単に自己紹介をします。名前は堀直也と申します。南伊豆ネイチャーガイドの代表、それとエコサーファーというグループの代表をやっています。現在36歳です。きのうが誕生日でして、蛇年の、ことし年男です。神奈川県横須賀市で生まれまして、東海大学海洋学部海洋土木工学科というところを出ています。今、残念ながらこの学科はなくなりました。

サーフィン歴は18年です。この右下に写っているのは私です。これはサーフィンで最もサーファーが憧れるチューブというわざをメイクしかけているところです。そういうわざなんです、この緑色のチューブの中に入るのが非常にエクスタシーです。ぜひ皆さんにサーフィンをやっていただきたいので、きょうはその辺を僕は徹底的に洗脳したいなと思っております。(笑)サーファー歴は18年で

す。だから、ちょうど半分ですか。人生のうち半分はサーフィンです。

趣味はもちろんサーフィン、それとキャンプも大好きです。1歳と3歳の息子がいて、奥さんがいて。生まれは横須賀で、大学を卒業して横須賀に戻り、藤沢に15年ほど住んで、今は南伊豆の弓ヶ浜というビーチから徒歩5分の、もともと民宿だったところに家を借り住まいしています。ということで、きょうは南伊豆から電車で来ました。

まずサーファターのイメージというのは、皆さんの中にいろいろあると思うんです。例えばロン毛、茶髪、適当、ヒッピーみたいな、そういうイメージがあると思うんですけど、僕が大好きな友人の中で鎌倉の二階堂というところでカフェをやっている友達がいるんですが、その友達は非常に雑学王で、本から映画から、いろんなものを読みあさり、見てあさり、いろんな旅をして、とにかくたくさんの情報を持っている、いわゆるカフェのよくある感じの、36歳なんですけど、何かいろいろ人生を知っているような、そういうおじさんがいるんですけど、その人に、自分が昔、発行していました、こういうエコサーファターフリーマガジンという、無料なんですけど、もう廃刊になってしまったんですけど、こういうものの中にサーファターのイメージでライターとして書いてくれということで、書いてもらいました。ここにいろいろ書いてあるんですけど、全部読みます。

「サーファターのイメージ。海。自然。湘南。ハワイ。アメリカ。サーフィンUSA。ビーチボーイズ。自由人。旅行。でかいことを言いたがる」。これはおもしろいですね。「細かいことを気にしない。行動力がある。サーフトリック。早起き。バランスがよい。ローカル。でかい車に乗っている。夏が好き。仲間を大切にする。でかい犬を飼っている。ジャンクフードが好き。寒いとたき火をする。ジャック・ジョンソン。くだものを食う。短パン。ビーサン。スケボー。色が黒い。ライフスタイル。白人文化。禅。ビッグ・ウェンズデー。気分屋。単純。何とかかなると思っている。急がない。いいかげん。時間に縛られない。快樂主義者。夜になると空を見て、気取っちゃったりなんかする。いい気分になると、夢なんか語っちゃったりなんかする。酒を飲むと、よいことを言おうと頑張っちゃったりなんかする。でも、その辺を突っ込むと、自然に片づけようとする。天気予報に詳しい」。

皆さん、笑ってくださいね。(笑) ここで笑っていただかないと、ここは笑いの場所です。

「うまいものを知っている。ジェリー・ロペス。オールド・スクール。にせものも多い。カワイコちゃんも多い。さわやか。手作りが好き。物を大切にする。民俗学。楽器をたたく。ラブ&ピース。ワイプアウト。ベンチャーズ。千葉。台風。稲村ジェーン。伊豆。アート好き。西海岸。サブカルチャー。車好き。アウトドア。写真。仕事嫌い。長髪。ドーナツを食う。Tシャツ。スウェット。ステッカー。物を拾う。パーティー好き。遊び場を大切にする。感情で生きている。ロングボード。気持ちいいものを知っている。風邪を引かない。筋肉質。チルアウト。どこでも着がえる。HANG TEN。釣り好き。ひげが生えている。茶髪。パタゴニア。無駄に英語をまぜて話す。ヨガ。さわやか。こだわりがある。大事にしているものがある。環境保護。野性的。気取っていない。自然体。ヒーリング。共存。かつこいい」。

ということで、フジムラ”KING”カズトというニックネームのやつが、足を骨折している、入院していたベッドの上でこの原稿を書き上げたわけですね。これは5年ぐらい前に彼がサーファターのイメージを書いているんですけど、まさにこれがサーファターです。間違いありません。一つも間違っていないです。

これをちょっとまとめます。つまり、サーファターとは。いいかげんです。非常にいいかげんです。

約束を守りません。自由人です。本当に自由人です。ラブ&ピース。とにかく愛で片づけようとし
ます。動物的です。創造的、クリエイティブです。直感です。とにかく直感で動きます。グローバル
です。非常にいいことです。国際的視野、そういう見解を持っています。そして最後に、クレージ
ーです。とんでもなくクレージーです。ばかげています。これがサーファーです。

それで、きょうはそんないいかげんなサーファーが取り組む一つの事例を皆さんにご紹介いたしま
す。これはビーチグラスです。ですが、僕はビーチマネーと呼んでいます。きょうはここにも見本を
持ってきたんですけど、皆さん、海好きですからわかりますよね。知っていますよね。ビーチグラス
です。

きょうは僕の友達が茅ヶ崎から来ているんですが、その一番奥の側にいらっしゃる寺尾さんとい
う方なんですけど、このビーチグラスでビーチグラスアーティストということで、ペンダントとか、ピ
アスとか、そんなものをつくっているアーティストさんがきょう来ています。

このビーチグラスを使って環境活動を実はやっています。どういう環境活動かといいますと、この
ビーチ「マネー」という言葉にありますとおり、このビーチグラスをお金のかわりとして使う活動を
2006年からやっています。もう7年ぐらいやっているんですね。そして、今回のキーワードはサーフ
ァーですからね。そうすると、52店舗の加盟店のオーナー、これは全てサーファーです。どうい
うことかといいますと、今このビーチマネーがお金のかわりとして使える場所が湘南の中に52店舗ある
んですけど、その52店舗のオーナーもしくはスタッフは全員サーファーです。

いいですか。もう一回言いますよ。このビーチグラスはもともと瓶です。ごみです。ごみを受け取
って、しかも「ありがとう」と、そのオーナー、スタッフは皆さんに言って、そしてサービスまで提
供していただくという非常に突拍子もないこの仕組みを、「楽しそうじゃん。やろうよ」と言ってくれ
た方たちです。みんないかにも真っ黒で、ひげが生えていて、サーファーっぽいんですね。みんなサー
ファーです。

じゃあ、このビーチマネーというのは何だよと。基本的なルールを僕が作りしました。これです。
ビーチマネーとは、ビーチグラスを——シーグラスとも言いますが、利用した湘南地域限定のエコマ
ネー、地域通貨です。

ビーチマネーになるビーチグラスというのは条件が2つあります。

まず一つ。直径3センチの円から必ずどこかがはみ出る。例えばこのビーチグラスでしたら、横幅
がそんなにないけど、縦の長さが3センチ以上ある。これは使えます。

次にステップ2、このビーチグラスを手で握ったときに痛くないこと。これで合格です。これはも
う立派なビーチマネーです。ですから、例えば物すごくもりもりの人で、物すごく手が分厚い人が、
まだガラスのかけらなのに、握って血だらけになりながら、「痛くない」と言ったら使えます。(笑)
いいかげんだから、いいんです。全然いいんです。

でも、これは何のためにやっているかという、海をきれいにする活動です。このビーチマネーを
いろんなお店で使うことが優秀なわけじゃなくて、海をきれいにするからこれが非常にいいんじゃ
ないかと僕は言っているんです。

どういうことかという、海に行きます。残念ながらごみがたくさん落ちています。そのごみをで
きればいろんな人に拾っていただきたい。そのために、「じゃあ、ビーチグラスを探そう。どうやら地
域通貨として使えるらしいから、やってみようか」ということで、「ビーチグラスを探そうか」となる

と、残念ながら、レジペレットとってこんな小さな米粒くらいの大きさのやつとか、プラスチックのもとだったり、たばこのフィルターだったり、いろんなごみが落ちているわけです。「じゃあ、それも拾っていただいて、ビーチグラスも拾ってください。ごみを拾って、このお店に行ってほしい」。それが正しい流れです。

どういうことかという、実はビーチグラスにはいろんな色があります。この中で一番よく落ちている色は、皆さん、何色だと思いますか。白です。じゃあ、次は何だと思いますか。茶色です。正解です。素晴らしいです。さすが海好きの皆さんですね。(笑) 白の次に多いのは茶色です。その次は大体緑とか水色。一番珍しいのは2色混合とか、赤。これは2色混合です。あとは、青じゃなくて紺というのもあるんですね。あとは黄色。この辺は全然落ちてないです。これは一番レアです。これは今でもお金のかわりとして使うんじゃないくて、ここに関してはそれ相当の価値ということで、とにかくこれは200円ぐらいの価値があるよ、50円ぐらいの価値があるよと。

これが基本的なルールなんですけど、お店によって、「いや、うちは白も2色も同じだよ」というところもあれば、「3センチ以下でも別にいいよ」というお店もあるんです。その辺は52店舗のお店の特別ないろんなルールがあるので、それを見てください。今52店舗あると言いましたけど、横須賀から、横浜から、鎌倉から、藤沢から、いろんなところにお店があるんですが、一つずつ紹介していくと時間がないので、ユニークなところ、ちょっと有名どころなお店さんを紹介します。

まず4番のMiddlesという雑貨屋さんですが、ここはおもしろいと思います。原則はビーチマネーマップ、さっきのマップに準じます。ですが、「どこでどう拾って、どうだったか」という話が重要です。これで金額の変動の可能性があります。オーナーは非常にくせ者ですけどね。(笑) こういうオーナーがいるんです。Middlesのオーナーはサーファーです。

そして、皆さんが大好きなパタゴニア。海好き、山好きはパタゴニアが好きですね。僕も大好きです。パタゴニア屋さんに行くと、鎌倉ストアのステッカーと交換してくれる。ちなみに、鎌倉だけじゃなくて、関内ストアと、金沢八景のほうにアウトレットがありますけど、そこでも同じようにストアのステッカーと交換していただけます。

18番のShop my crew、ここは角がとれたもので3センチ以上を2個、色は関係なくて、ワックス1個と交換。サーフィンというのは、サーフワックスというのを板に塗るんです。滑りどめです。そのワックス1つは250円ぐらいするんです。それをもらえてしまうということです。非常に太っ腹なサーフショップのオーナーです。

それと、この一番上は有名ですね。新江ノ島水族館さん。ここはポストカードとか、あとは江ノ水さんでコレクションしている素晴らしい貝殻があるんですけど、その貝殻と交換しましょうと。

あとは、「ななはち」という居酒屋さんでは、面白いですね、「「ビーチマネー使います!」と言ってください。そうすれば話ははずむじゃん!と店主より」。(笑) おしゃべりが大好きなサーファーのおやじさんです。

その下の林美容室。これはユニークです。まゆ毛カットします。ビーチマネーでまゆ毛をカットしてくれるんです。素晴らしいサービスです。

これは最後。ホテルマリンブルー茅ヶ崎。ホテルなんですよ。ホテルで、大きさ等は決めておりません。1個50円引きします。1組1回10個まで使えます。何と500円までの引き引きをしていただける。サイズは関係ないんですよ。こんな米粒みたいなのも10個持っていったら500円引き

てくれる。

これは一店舗一店舗、取材に行ったんです。ホテルへ行きました。入り口がよくわからないので、普通にお客さんのつもりで行きました。そうしたら、マネージャーの方が出てきて、「こちらに来てください」ということで、すごいVIPルームみたいなのに連れていってもらって、「ああ、こんなところもあるんだ」みたいな感じでいろんな話をされていて、「実際に使う方はいらっしゃるんですか」と言ったら、「いるんです」。「ああ、そうですか。どういう方が使っているか、もしよければ名前とか写真とかはいいんで」——もちろんないとは思いますが、「教えていただけないですか」と聞いたら、「年配のカップルの方で必ずビーチグラスを持って仲よく来てくれるんですよ」。「ああ、そうですか」。うれしかったです。

いろんな取材をうちは受けるんですけど、ホテルマリンプルーさん経由で、そういったホテルを紹介する雑誌があるんですけど、そこに水着を着て、ジェットバスみたいなのところにいるすごく美しい女性が、ビーチマネーをこうやって持って、「うちのホテルでこれを使えま〜す」とか、そういうのがばっちり載っているんですけど、僕としてはすごくそれはよかったと思って。そういったところが、ホテルマリンプルーさん。

モンベルクラブ。パタゴニアさんと同じようにモンベルが好きな方はたくさんいらっしゃると思いますが、ここはポイント付与という形で協力してくださっています。

それと、小田原に1軒だけ「いわほり」さんという魚屋さんが、これはおもしろいですよ。白と茶色はアジ、イワシ、サンマ、水カマスの干物。水色と緑色はサバ、本カマス、イカ、エボダイの干物。2色混合と赤、紺、黄色はスペシャルなフィッシュ。太っ腹ですね。魚と交換してもらえるんですよ。すばらしいですね。

というような感じで52店舗のクールなサーファーたちが協力して、この活動は何と7年目に突入したわけです。

2006年4月から現在までの取材の依頼がとにかくすごいです。その数、何と既に約300来ています。大体6で割ると50。年間で50。さらにそれを12で割ると5件ぐらい。だから、月に5〜6件は必ず取材が来ていて、テレビ、新聞、雑誌、ラジオ、いろいろあります。

その中で幾つか紹介したいんですが、これは朝日新聞です。もう5年ぐらい前なんですけど、こんなに大きくカラーで取り上げていただきました。

これは、僕も昔これで勉強していましたけど、NHKのラジオテキストに教材として出ちゃったんです。「ビーチにお金」というタイトルで。これですね。「By the way (ところで)、there's money on this beach. (このビーチにはお金が落ちている)」、「え、どういうこと？ エリちゃん」みたいな感じで、「like a money だよ」みたいに、ビーチマネーのことがここに出てくるわけですね。これをペラペラめくると、ビーチマネーのことが、be動詞+過去分詞みたいなのところで、いろいろ出てきていまして(笑)、「おお、すごいじゃん。へえー」という教材にもなってしまった。これはレッスン76じゃなくて、このことを男の子が、この女の子かわからないんですけど、「行ってきたよ」というような絵のコンクールみたいなのに絵と一緒に出した、そういうレッスン140ぐらいのものがあって、そのときにもまたビーチマネーが出てきたんですけど。だから、ビーチマネーとNHK基礎英語3はすごく仲よしで、しょっちゅう出てきているという状況です。

きょう僕が一番伝えたいのはこの次です。僕はきょうここへ来て何を皆さんに一番伝えたいかとい

うと、サーフィンしようと。とにかくそれです。きょうのテーマは「海と生きる」、環境のこと、環境学習のことということですが、頭でっかちにいろいろ難しいことをあれこれやるんじゃなくて、とにかく自然の中に入って波とたわむれて遊ぶこと。

ということで、僕はふだんネイチャーガイドという仕事の中で、海も山も川も行くんですけど、サーフィンスクールを一番メインでやっています。子供だけ、大人だけ、親子向け、いろんな方にサーフィン教室をしています。それで、その動画をBS朝日さんに取材していただいたものがありますので、それを見ていただきたいんですが。

(動画上映開始)

ナレーター 今週のアーシストはエコサーファーの堀直也さん。きょうは、子供たちに伝えたいこと。

堀さんは子供たちを集めてサーフィン教室を開いています。海のすばらしさを実際に体験することが海への思いを育てると考えているのです。

堀 子供のころとにかく海、川、山で目いっぱい遊んできたので、それが全部楽しくて、それをやってほしいなっている。

ナレーター この日、集まったのはサーフィン初心者の子供たち。初めはうまく乗れませんが、波と親しんでいくうちに、ほら、このとおり。

子供 やったー。

堀 すごい。

子供 気持ちいい。サーフィンに乗れてうれしかった。

ナレーター サーフィンの後はみんなで海辺のごみ拾い。堀さんは子供たちが海で遊びながら地球環境に関心を持つようになってほしいと考えています。

堀 例えば、なぜこんなにごみが海岸に漂着しているんだろうとか、何できょうの海はこんなに濁っているんだろうとか、そういった素朴な疑問から入っていけば、おのずと海で遊んだりすることが環境問題にリンクしていくと。

ナレーター 子供たちの未来のために。

みんなアーシスト。その言葉は……

(動画上映終了)

堀 そういった感じなんですけど、僕のサーフィンを見てもらいます。

(動画上映開始)

ナレーター 堀さんは週に一度は趣味のサーフィンを楽しんでいます。

(堀 これは鵜沼です。)

堀 やっぱりふだんは社会の荒波にもまれているわけで、やっぱり自然の中の荒波にもまれて、誰と争うわけでもなく、リラックスするための、本当、大事な生活の一部ですね。

ナレーター 波そのもの一つになって、ゆったりサーフィンを楽しむのが、堀さんのスタイル。

堀 できるだけ1本の波を長く乗り継ぐのが僕は好きなんです。なんで、すごく小さくなくてもずっとこんなになってしゃがみながらサーフィンするのが好きなんです。

ナレーター 寄せては引き、引いては寄せる波。日によってさまざまな表情を見せる波を感じながら、自然と一体になっているんです。

(動画上映終了)

堀 こんなものにしておきます。この後、すごいわがが出てくるんですけど。(笑) こんなものです。では、こっちのほうに戻ります。

そういうことで、「あなたもサーフィンにトライしてみませんか?」と。これが言いたいんです。

ここにいる方は当時 50 代後半の方です。文教大学のある教授の方で、「サーフィンをやりたい!」と言ってくださって、「年齢は関係無いです! やりましょう!」と。2 時間で見事に立ちました。それと、「サーフィンをやるともてる?」と良く聞かれます。(笑) 非常に大事なところなんですけど。もてるかどうかは別として、こういうかわい子ちゃんがちらほらいます。こっちの写真は、僕は物すごく気に入っているんですけど、小学生の女の子とお父さん。親子でね。これはサザンビーチでスクールをやったんですけど。茅ヶ崎です。これは南伊豆です。これはつい最近の写真です。とにかく男の子も女の子も、若い子もシニアの方も、全然トライできます。ぜひ僕は南伊豆の弓ヶ浜というところに今住んでいますけど、サーフィンをやりに来てください。

今後の目標です。ビーチマナーの加盟店が 100 を超える。これをクリアします。

瓶の製造メーカーが正式スポンサーとなる。これは、もとは何かといたら瓶なんです。ここだけだから言いますが、コカ・コーラとか、ロゴが入ったまま落ちているんですよ。すばらしいコンサルを僕がつけまして、その方に資料をつくってもらって、コカ・コーラとか、キリンビールとか、アサヒビールとか、「よし、これでプレゼンへ行こう」と。行こうかなと思っているんですけど、なかなか行けないですね。(笑)

調べてみると、アメリカで「シーグラスコンテスト」というのをやっているんです。これは何をやっているかという、シーグラスはオレンジがどうやら世界的には一番珍しいらしいんですけど、オレンジのを持ってきた人が優勝とか、珍しいシーグラスを持ってきてコンテストをやっているんですけど、そのコンテストに出場して僕はビーチマナーという仕組み、このシステムを「どうだ。メイド・イン・ジャパンだぜ」ということで紹介に行きたいんですけど、これもまだ行けてないですね。

ビーチマナーショップ一覧&マップ付きの冊子。こういうのがあったら、恐らく観光するときなどにいいんじゃないかなと言いたいんですけど、これもまだやっていないですね。

あとは、リバーグラス、マウンテングラス。要はビーチグラスがあれば、川にもあって、山にもあるはずなんですね。もちろんだんどん下へ下れば下るほど角がとれてくるので、マウンテングラスなんていうのはただのガラスのかけらなのかもしれないんですけど、要は何をしたいかという、川と山と連携を図っていきたいと思っているんですね。

あとは、ビーチマナーを絵本にしたいなと思っているんです。「どんぶらこ、どんぶらこ」みたいな感じで。川からビーチへ来ました。かっぱの涙と言っている人もいるよ、という。人魚のうろことか、何かそういう例え話をつけながら絵本にしたら、子供も聞いてくれるんじゃないかなと思っています。

あとは、先ほど言ったように、メイド・イン・ジャパンだよというのを世界中で発表して、世界中で使えるようになったら、これは非常にうれしいなと思っています。

ふだんの仕事ですけど、僕は月曜日休みが多いんですね。火曜日から金曜日は、ふだんは林業作業員ということで、あとは漁師。両方とも見習いなんですけど。土日は大体ネイチャーガイドをやっています。こんな感じです。山バージョンの堀直也ですね。さっきのは海バージョンだったんですけど。直径 40 センチぐらいのスギ、ヒノキだったら今倒せるようになりました。でも、指を切りましたね。

もう少しで切り落とすところだったんですけど。

畠山先生という有名な方がいますけど、「森は海の恋人」とよく言いますよね。やっぱり海のことだけやっていてもわからないことはたくさん出てくるんですね。皆さんは大先輩なので、「そんなの、わかってるよ」ということだと思うんですけど、僕はそう思ったんです、35歳にして。それで、1年ぐらい前から山に入って、山のことも勉強しています。しかも、職人さんなのでめっちゃめっちゃ厳しいんです。

ビーチマナー以外にどんなことをやっているかといいますと、小学生を対象にした「南伊豆キッズ冒険合宿」。あとは、自分の母校である大学の海洋学部の環境社会学科とエコツアーの授業を展開したり、ネイチャーガイド——サーフィン、カヤック、ツリークライミング、トレッキング、林業体験、クワガタとり、シュノーケリングといったことをやっています。

今後の展開としては、アカデミック系でどんどん攻めていきたいなど。要は「海で遊ぶ。楽しいよ」じゃなくて、「海で学ぶ。すごいぜ」みたいな感じ。ちょっとワンステージ上に行きたいなと思っています。

ぜひきょうは皆さん、ここに60人ぐらいいらっしゃると思うんですけど、Facebookを今、皆さんもやっていると思うので、お友達になりましょう。堀直也で検索していただいて、基本的にメッセージを必ずつけてください。「サーファー万歳」とつけていただければ（笑）、きょうの講演を聞いた方なんだなということで、すぐにオーケーをして、すぐにお友達になりたいなと思っています。どうぞよろしくお願いします。それ以外に、Facebookで「ビーチマナー」と「南伊豆エコツアー」というのをやっていますので、こちらの「いいね！」も必ずお忘れなく、よろしくお願いいたします。

最後に、これは僕の愛するファミリーです。海も環境も大切ですが家族はもっと大切にしましょう、そういうことですね。（笑）

以上でございます。どうもありがとうございました。（拍手）

司会 堀さん、ありがとうございました。